父親意識の深化過程

—乳幼児を子どもにもつ成人男性へインタビュー調査—

堀 由里

(名古屋女子大学)

キーワード：父親意識、子どもの発達、M-GTA

Psychological processes of becoming father — interview with adults man who care infant children —

Yuri HORI

(Nagoya Women's University)

Key Words: Father's sense, Child development, M-GTA

問題と目的

女性の社会進出、核家族化といった現代社会において、多様な働き方・生き方が選択できる時代になり、男性も育児に参加する機会が多くなった。父親の育児参加は、子どもの社会性や認知能力など子どもの発達にポジティブな影響を与え、父親自身の家族・家庭に対する貢献感を通して父親本人のQOLを高める効果も明らかとなっている。森下(2006)は、子どもとの関わりを通して「家族への愛情」、「責任感や冷静さ」、「子どもを通しての視野の広がり」などの感覚を父親は獲得していることを明らかにしている。

しかし、子どものとの関わり経験から得られる感覚や行動は、子どもの発達や状況によって変化するものと予想される。一般的に父親は子どもが喋り出してから可愛さが増すと言われていたり、配偶者の妊娠を知った時から実際に子どもに直面するまでもに気持ちの変化が生じているであろう。これまで保育や教育の世界では、保護者支援といえど主たる養育者である母親の支援に注目が集められていたが、父親の育児参加が増えるに従い、継続的に変化する父親の感情や行動を詳細に検討することにも大きな意味があると考えられる。そこで本研究では、子どもを授かる前の段階から、子どもの発達を追いながら、我が子そして子ども一般に対する父親の意識の変化・深まりについて調査することを目的とする。

方法

調査協力者とデータ収集の手続き

東海・関西地方に住む30代(平均34.3歳)の男性4名を対象とした。いずれも乳幼児(0-6歳)を子どもに持つ父親で、研究内容の趣旨・方法、拒否と中止の自由、プライバシー保護に関する説明を行い、同意を得られた父親を対象とした。

2016年7～10月にかけて、一人ずつ個室で40分程度の半構造化面接による調査を実施した。面接内容は同意を得てICレコーダーで録音した。

分析方法

録音したインタビュー内容を逐語化し、ローデータとして用いた。木下(2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified-Grounded Theory Approach:M-GTA)に基づき、ローデータを分析対象とした。

データを解釈する観点を決めるため「子どもを授かった父親がどのような心理のプロセスを辿るのか」という分析テーマを設定し説明概念を生成した。概念生成時には、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、具体例などを記入した。

次に、生成した概念同士の関係を個々の概念ごとに検討した。それとともに、いくつかの概念からなるカテゴリを生成し、カテゴリ相互の関係について分析結果をまとめた。まとめた結果の概要をプロセスの筋に沿って文章化し、最終的に結果図を作成した。

結果と考察

分析の結果、31の【概念】、11の《カテゴリー》、4の『大カテゴリー』が生成された。プロセスを考慮して概念とカテゴリーの関係を検討し結果図を作成した(図1)。

全体のストーリーラインを以下に示す。まず、父親は世間一般の子どもに対しては【苦手】意識を持っている。自分の子どもに対しても、《父親になりたい気持ちの薄さ》や《妊娠発覚での複雑な気持ち》など『具体性のない父親観』を抱いている。しかし、子どもの成長を間近でみることで、【人間だった】という《実感》が芽生え、【遊ぶ】、【教える】など積極的な《育児期の現実的行動》をとるようになっていく。それと同時に《自分自身の変化》を感じ取り、家族や社会といった《俯瞰した考え》を子育ての中にもつようになり『父親意識の深まり』へ達している。世間一般の子どもに対するイメージも、子どもが授かる前とは大きく変化した。【共感】といったポジティブなものになっている。父親である、父親になる、という意識が初めは薄かったが、子どもの成長とともに、父親の意識も大きく変化していることが明らかとなった。

図1 父親としての意識の変容プロセス

引用文献

木下康二 (2007). ライブ講義 M-GTA 実践的研究法—修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて— 弘文堂

森下葉子 (2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17, 2, 182 - 192.

(本研究は平成28年度名古屋女子大学文学部児童教育学科に提出した安井綾乃さんの卒業論文を再分析・再考察したものである。)